



定本與謝野晶子全集

第八卷

講談社



定本 與謝野晶子全集



第八卷 歌集八

昭和五十六年十二月五日 第一刷發行

定價 三千五百圓

著者 與謝野晶子

發行者 三木章

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽二二三
郵便番號 二三 振替東京 八一五〇
電話東京 (〇三) 四三二二 (大代表)

組版 株式會社 熊谷印刷

印刷所 多田印刷株式會社

製本所 大製株式會社

◎與謝野光 一九八一年
落丁本・亂丁本は小社書籍製作部にお送りくだ
さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-126118-5 (文事) Printed in Japan

目次

全短歌索引

一

年譜

四〇一

著作目録

四三五

参考文献

四八一

全 短 歌 索 引

凡例

- 一、これは本全集第一巻―七巻に収録された全短歌の索引である。
- 二、○印のなかのアラビア数字は巻数を示し、漢数字はページ数を示す。
- 一、見出し語
第一句をもって示した。ただし第一句同音のものが二つ以上ある場合は第二句まで、第二句まで同じ場合は第三句までを見出し語とした。
- 一、見出し語の表記
全集本文と同じかなづかいを用い、漢字の字体は当用漢字を使用した。
- 一、見出し語の配列
現代かなづかいの五十音順による。ただし「ぢ」「づ」は「じ」「ず」に、V音は行に配列した。
- 一、清音、濁音、半濁音の順に配列した。ただし第一句に同語で清音と濁音のあるもの（例 わたつみの、わだつみの）に限り、第二句目により配列した。
- 一、読み方は本文のルビに従い、同語でルビの二通りあるものは、原則としてそれぞれのところに配列した。ただしルビが無く二通り以上に読めるものについては作者の他の短歌を参考にし、適宜に整理、配列したものもある。
- 一、青雲―あおぐも のように、空見出しを立て引き易さの便を図ったものもある。
- 一、脚注に※印を付けて訂正した字句は、訂正されたものの形で配列した。

あーあいよ

あゝ驕り
あゝ少女
あゝおのれ
あゝこの日
あゝ暦
あゝ皐月琵琶のみづうみ
あゝ皐月仏蘭西の野は
あゝ皐月みどりひろがる
あゝ皐月めでたき夏の
あゝ政治
あゝ聖母
あゝ夏の日
あゝ野の路
あゝひつぎ
あゝまぼろし
あゝ胸は

あ

①一〇三
①一三九
③二二
④一四
②四
②三八
③八四
④五
④六
③五一
①二三
①三九
①二七
①三五
②七
①一四

あゝ四月
あゝロダンいみじき石の
あゝロダン君は不思議の
相あひぬ
相在りて
相あるを
相あれば
藍色の大川遠し
藍色のかきつばたより
藍色の濃霧の中に
相思ふ恋のかたちも
相おもふ人のふたりが
あひおもふ二人はとはの
逢ひがたき斎の女王と
逢ひがたき人と遼河の
逢ひがたき人を求めて
藍がちの
相川の羽田の浜の
相川の羽田本町
相川や青野の山の
相川や石葺く屋根の
相恋ひぬ

④五七
④三
④五
①四九
①三八
②三五
②三三
②三五
②五
④四七
③三七
①三六
④三六
⑤三七
④四七
②二三
⑤二
⑤二三
⑤二三
⑤二三
①三〇

相すまむと
相住みて片恋をすと
相住みて優しき人と
愛憎の
あひ初めし
あひそ屋が
あひだなく青き鳶はふ
あひだ無く浴みてましを
相並び
相似たり
I夫人
相見ける
逢見ずて
逢見ねば
相見るを
あひ見れば
愛欲の
愛欲は
愛欲を
相寄りて秋を泣くなり
相寄りて地上に知らぬ
相よりてものの哀れを

①二四
③三六
⑤五七
⑤六
①二四
⑥四三
②一四
⑤五一
②一三
⑥三九
⑥一六
①四〇
②三四
②三七
③四六
①二七
④三八
②三六
④五一
④四一
④二六
②二五

あいよーあおく

相よれば	②一三四	青海の波しづかなる	④三三四	青き壺	④四七一
藍を引く	⑥二〇三	青海の波にあそぶを	⑦六三	青き菜と	③五九
アウギユスト海描くらん	④五〇二	青海の巻く四国にて	⑥三八〇	青木原	⑤一〇
アウギユストその小き手が	④五〇三	青海は	⑥三七八	青き火に	③七
逢ふことの	④五〇三	青うみもおのころ島も	⑥二〇六	青き灯の家と並べる	①二九一
逢ふことは	③五四四	青海も国の太子の	⑦元	青き日の空にありとも	④五八
逢ふまじと	②二九〇	青海を行く船に立ち	⑦三三	青き富士	②三二
逢ふまでの	④一〇	青海をわが心より	④二七九	青き星	⑥六
あえかなる踊子来り	②二〇八	青海をわが裾に引く	④三二〇	青き水	⑦一九〇
あえかなる白きうすもの	③八七	青貝の	⑦四四〇	青きもの	④三二
あえかなる月の光を	①四四	青蛙	④四二	青き山家近くして	②二五
敢てからじ	⑤四六五	青がちに	④三九一	青き山春の四月を	④四一九
あへて問ふ	①三四二	青金の	⑦三三	青桐は	③一九五
青あらし	①三四	青き蘆	②二七	青草の	④五三
青色に	⑦三四九	青き糸	③四〇五	仰ぐ時	⑤三七〇
青色のをしどりの毛の	⑥二一	青き枝	③一〇七	青雲がさびしき雲に	⑥三五
青色の甕とわれの	②三	青き蛾の	③四九二	青雲が作れる盤の	⑥三六九
青海と	③四四七	青き甕	③三三	青雲と桜の花の	④三三
青海に近き丹那の	⑥三三	青き衣	②四八	青雲としら雲の来て	⑥六三
青海に冷たき秋の	⑦三三	青き木よ	②二〇二	青雲と長く続ける	⑤五七
青海のちひさき島の	②一〇五	青き草	⑤二七四	青雲に	⑤一五二
	③五〇六	青き象	④三三	青雲の落ちて枯梗の	⑦二七

あおく—あかえ

青雲の深く重る	④三二	青空のもとに楓の	⑦四九	青葉長け	⑦三六
青雲を	①三二	青空のもとに足らひて	⑥四七	青葉満ち	⑦四七
青けぶり	③三六	青空を道遊山の	⑤一〇〇	青原の	①三九
青ざめし産屋の我を	②三四	青空を名残のもの	③二八	青みたる	④三九
青ざめし鏡の中の	③五四	青空をもたず楓の	④三九	青やかに皁月の柏	④四六
青さめて	②四七	青つづら	⑤一七	青やかに誇らしき山	④四六
青芝の	③九四	青となり	③五七	青やかに松立つ街の	④一五
青白き天つ日一つ	③二六	青波の	⑥三五	青柳と	③一八
青白き初秋の日の	③四三	青波は	⑥三五	青柳の	②一五
青白く霜降る朝に	④二九	青鈍も	④二	青柳あなづり初めて	③二
青白く榆錢乾けり	⑤三九	青根なる	⑤二三	青柳葉はいとしげく	③三五
青白し虚空蔵山の	⑦三〇	青根の湯秋のとしび	⑤二四	青山の	⑥四一
青白し寒しつめたし	②八	青根の湯阿武隈川を	⑤二二	青蓬	⑦四五
青すすき	⑦四三	青根の湯五十四郡の	⑤二二	青を引き	⑥三〇
青墨の	④二五	青根湯の	⑤二二	あかあかと柑子のいくつ	②三九
青摺の	⑤五五	青根湯は	⑤三六	あかあかと夕映ひかり	③一六
青空に	③四七	青の魚	③三三	赤蜻蛉風に吹かれて	②八三
青ぞらの明るき時も	②三三	青の傘	②三五	赤蜻蛉舞ふうつくしさ	②四九
青空の穴ふたつある	⑥三四	栗生(あき)の島	⑦二	赤池の	⑥三一
青空の下の大地に	②三四	青の鳥	③五四	赤い実が	③四二
青空の千尋の海に	⑦一九	青の肌	③五四	赤絵てふ	③三三
青空の張りてたるまぬ	⑦九三	青葉さへ	⑦九	赤絵なる	⑥六二

あかき—あかつ

赤き家	⑥二	紅き実を	①二五	赤沢や	⑥四三
赤き糸	⑤三九	赤城山かばかり外に	⑤三四〇	アカシヤに風の騒げば	⑤三九
紅き絹	②一六	赤城山小沼は隠れて	⑦八一	あかしやに柔き芽を	③四四
赤き雲樺を洩りて	②四〇五	赤城山百合しろかりし	①二八	アカシヤの	⑤四二
紅き雲波よりはやく	⑤三三	あか切れの	②二七	赤茶けし	②四二
あかき鞍	⑦四四	赤くして	⑤五九	暁にうぐひすの羽の	⑦三九
赤城路の	⑦七	赤倉に休沐の恩	⑦二九	あかつきに馬悲しめり	⑥三〇
紅き点	②一七	赤倉に雲満ちわたる	⑤八六	あかつきに梅の折枝の	⑥三二
赤城なる地蔵峠と	⑥三二	赤倉に知らぬ温泉の	⑤四七	あかつきに鳥のねぐら	⑤一六
赤城なる冬の木立が	③三〇	赤倉に野尻の湖を	⑤三	あかつきに雁の列をば	⑤三三
赤城の嶺	⑦四一	赤倉に迎へし朝の	⑤二	あかつきに霧の水の	⑦一八
あかき旗	②三九	赤倉の大湯の窓の	⑤八六	あかつきにこほろぎ鳴きて	
紅き薔薇君籠と云ふ	④四七	赤倉の草の斜面に	⑦二七		④六七
紅き薔薇わがはぐくみし	④四八	赤倉の毛樺の大樹よ	⑤四三	あかつきに真珠の庵の	⑥四六
明き日に	③三七	赤倉の山少女ども	④二六	暁に何を刈らんと	⑥一七
紅き日の	①二五	赤倉の山より出づる	⑤八	暁に波がしらより	⑦四五
赤き日は	④四四	赤倉や	④一九	暁に光るいくつの	⑦四七
赤き灯を	⑥四九	赤倉よ	⑦三七	あかつきに町山口の	⑥四四
赤き蛇	②三七	赤黒き	②三三	あかつきに松の花粉の	⑥一七
赤き帽	⑥三三	明ければ	⑤四三	あかつきに民衆の星	⑥三
紅き星	①三五	赤坂の	④四八	暁にも思ふこそ	⑤二六
赤き実の	⑤三二	赤沢に	⑥四三	あかつきに矢車草の	④四四

あかつ—あかつ

③
三
八

暁の富士朱金をば

⑥三八〇

赤土のくづれて落つる

④
四
六

あかつーあきか

赤らか
示ら竹

① 二九〇

秋風に物の仮屋と

⑤
⑥

秋風壯氣二女上

③ 二八

あきか—あきく

秋風は上なる雲と	⑦八二	あきかぜや空海法師	⑥七九	秋川に	⑦二三
秋風は男の窓の	②九六	秋風や鎖のやうに	⑥三八	秋来り芝居めきたる	④三七
秋風は凱旋門を	③九	秋風や信濃に得しは	⑦三〇	秋来り何か身に沁む	③五三
秋風は家畜小屋より	③三三	秋風や十三仏の	⑥四六	秋きたり日のひかりや	②四七
秋風は必らず音す	②三	秋風や白き小舟に	③一六	秋来り身をえせものに	④四七
秋風は血の吼ゆるごとく	③四八	秋風や沙山を下り	⑥四九	秋来りものに抗ふ	②一九
秋風は長き廊ある	④六二	秋風や千曲の川の	④三三	秋来りものの減ぶを	④三七
秋風は二階の戸のみ	⑤五五	秋風や弔旗を立てて	⑦四七	秋来る今新しく	③六
秋風は野菊の咲ける	④四〇	秋風や天王川は	⑦九〇	秋来る窓と机の	③七
秋風は吹きもまよへど	④四〇	秋かぜや燈の灘の	⑥二九	秋来ぬと	②一八
秋風はむら雲いでて	⑥六	秋風や船、防波堤、	⑦三八	秋きよし球磨の大河の	⑥四三
秋風は柳の木をば	③二〇	秋風や水脈のみ見れば	⑥三三	秋きよし執政庁に	⑦三七
秋かぜは鈴の音かな	①八八	秋かぜや破れし網も	⑥四九	秋きよし西天草の	⑥四六
秋風は蟻に似る手を	③二〇	秋風や病む昨日まで	⑤四九	秋きよし山ことごとく	⑦四三
秋風も払はざりけり	⑦三三	秋風や楊氏にあらぬ	⑦三七	秋清し露台に出でて	⑦三二
あきかぜも払はぬごとし	⑦三七	あきかぜや懶青楓と	⑥三三	秋霧の	⑦八
秋風や浅間の霧の	⑦四〇	秋かぜやわがはらからの	②一九	秋霧や	①七
秋風や厚織物の	③二〇	秋風を危ぶむやうに	⑦四三	秋霧を	⑤三
秋風や尼の姿に	③二	秋風を負ふ人のごと	④六七	秋草の花びらにじむ	④四七
秋風や一茶の後の	⑦三七	秋風を思ふままにも	③一六	秋草の山のぼる馬	⑤四
秋風やかなへの如き	④九七	秋風を更らに研ぎたる	⑥四三	秋草も	⑦八
秋風や悲しきばかり	④四六	秋風を難ずる如き	⑥三五	秋くると	②三九

あきくーあきの

秋来ればおのれに帰る	④四一	秋立ちてのちいくばくぞ	⑦四七〇	秋と云ふ白き川をば	④四三
秋来ればかたより心	④四六	秋立ちてのちの飯屋を	⑥四八九	秋と云ふ冷たき床に	④五二
秋来れば恋も生命も	③二六	秋立ちぬこの朝はやく	②一九	秋と云ふ真白き瓶に	④七
秋くれば手に拾ひたる	③七	秋立ちぬ子のことよりも	③二七	秋となり心ぼそしや	②四五
秋くれば根も枯れぬらん	③二〇	秋たちぬ奈良の都の	②三八	秋となり事を好める	②四三
秋くれば腹立つことも	②八〇	秋立ちぬ街の広場に	④四一	秋となり猶人よりも	②四一
秋来れば短き文を	③四六	秋立つや貝のはだへに	⑤三七	あきなひに	⑤二六
秋来れば安からぬかな	④四〇	秋立つや鶏頭の花	②一五	秋に着ん	⑤五四
秋くれば夜毎めでたき	③三二	秋立つや夜光の貝の	⑦三九	あきにたる	③三九
秋くればわれも鈴振る	③五二	秋立てば	③二一	秋の朝縁に坐りて	③四三
秋さむし異国の布帛	⑥七四	あきたらず	①三六	秋の朝黍の木などの	②七三
秋寒し石老の山の	④三七	飽き足らぬ	②六一	秋の朝君はつるべの	②九四
秋寒し旅のをんなは	⑥四四	空樽の	③一七	秋の朝キヤフエエの椅子に	③四〇
秋寒し布を相摸に	④五五	秋近き	④一三	秋の朝胎内堂に	⑦八七
秋寒し富戸の岬の	⑥四四	蜻蛉いと	④五一	秋の朝旅びとあゆむ	①三三
秋雨と	⑥三六	秋つひに	①三五	秋の朝わづらふ思ひ	④四一
秋雨の	①三七	秋津こそ	⑥二六	秋の雨朝より降りぬ	③一九
秋雨は心か物か	③三七	蜻蛉飛び	⑦三六	秋の雨大阪人が	②四三
秋雨は羊の皮の	③五四	蜻蛉など	③一七	秋の雨君をまつかな	②四八
秋雨はわがさかづきに	②四三	あきつ羽の	②四九	秋のあめ共同丸と	⑥三八
秋雨は別れに倚りし	①八五	秋と云ふ生きものの牙	③一九	秋の雨木立濡らせば	②四九
秋すでに	⑦二七	秋と云ふ薄水色に	③二八		

あきの—あきの

秋の雨信濃の山の	⑥三七	秋の風かの来るとき	②三〇	秋の来て	②三四
秋の雨しぶしぶ降れる	②二三	秋の風枯れて行くなる	⑦三二	秋の来ぬ	③四八五
秋の雨精進の船の	⑥四八三	秋の風黄色と紅の	③四三	秋の霧晴れ曇りして	③四八五
秋の雨たまたまけふは	②三〇	秋の風きたる十方	①一八	秋の霧深き所に	⑥三八
秋の雨墓の中にし	④四二〇	秋の風君見ることの	③三	秋の霧身をまく時に	④四二〇
秋の雨よき白玉を	④六七	秋の風草をなびかし	③四八	秋の草見えざるものの	⑦二九九
秋の雨黄泉の道まで	④四四	秋のかぜ口を窄めて	②一七	秋の草みなしろがねの	②一七
秋の雨わが真上にて	④四七	秋の風支那すだれより	③〇三	秋の雲いと哀れなる	③三九
秋の雨わたり二間の	②八	秋の風空のひまより	③三一	秋の雲ただ真白くて	④四四
秋の家	④四八三	秋の風竹の柱に	④四九	秋の雲はかな心の	①三六
秋の池白樺の木の	⑦九四	秋の風戸を繰る顔を	③四九	秋の雲みやこの空を	②四三
秋の池それより榛の	⑥六	秋のかぜ那須の七湯が	⑤三二	秋のくれ	②三〇五
秋の海すきと山路と	⑥三三	秋のかぜ涙ぐみたる	②三	秋の里は	①二〇〇
秋の海月夜にあらで	⑦三七	秋のかぜ奈良の都の	②九〇	秋の潮	⑥三五
秋の海百歳の島	⑤三五四	秋の風針につきたる	②一六	秋の島	②二七
秋の海まことに怪しき	⑦三三	秋の風吹きも通ひて	②四一	秋の空重なる富士と	⑥三八
秋の海われは悲しき	③二八	秋の風やがて冷たき	②三六	秋の空澄むにかも似む	③四三六
秋の「がく」	⑥三七	秋の神	①二三	秋の空冷たき水の	④一六三
秋のかげ今わかかりし	①一五	秋の神の	①五	秋の空野分がしたる	④四〇九
秋の風魚の皿をば	③四一	秋の蚊帳	③三三	秋の空はしこくぞ飛ぶ	④七四
秋の風思ひ上れる	④三六	秋の川雁の声ほど	⑤一六	秋の空夕焼ぐもも	⑥四七九
秋の風親にはなれて	②二六	秋の川豊能あたりの	⑦四〇九	秋の空夜はいなづまを	④四〇六

あきの一あきの

秋の長け	⑤四八六	秋の日の泉の波を	③二〇二	秋の屋栗の実をもて	⑤四九〇
秋の蝶	⑦八八	秋の日のうす桃いろに	③七	秋の屋柏樹つづける	⑥三五
秋の月溪の蒲生の	②三六	秋の日のかのまた川の	②一四	秋の日を	④一六
秋の月法気づきても	⑥三二	秋の日の銀の雨さへ	③三七	秋の富士	⑥三三
秋の露	②四四	秋の日のころよさかな	②二	秋の食	①四
秋の寺	⑥八〇	秋の日の御所の築地に	⑤四四〇	秋の船	⑦三六
秋の沼を	①三六	秋の日の空の曇りて	⑦四一七	秋の譜は	①三三
秋の野の	③一六	秋の日のダリヤと云へる	④一四	秋の星	⑥四四
秋の蜂	⑤三〇	秋の日のだりやの花の	②〇三	秋の水赤土山を	⑤三五
秋の花風に散る日は	③一五	秋の日の露をよるこぶ	②四三	秋の水麻の綱をば	④三六
秋の花散りて一つに	④七	秋の日のひうち灘の	⑥三九	秋のみづ大手の里を	⑦一九
秋の花稀れに摘めども	⑥八一	秋の日のボンボンダリヤ	⑥六九	秋の水小諸の城の	⑦四〇九
秋の花満地に咲きて	②三六	秋の日の夕となれば	②三八	秋の水次ぎの湖沼へ	⑦四三
秋の葉の	⑦二	秋の日は同じいみじき	⑥四四	秋の水なかの島なる	①八四
秋の薔薇落葉する木の	④三〇七	秋の日はさびし(淋し)切	③六、七	秋の水穂薄ほどの	④三七
秋の薔薇さびしと云ひて	③二〇	なし	②四四	秋の水もの悩みして	④三〇
秋の日は黄なる酒をば	④一五	秋の日は涙こぼれぬ	②六〇	秋の路	①三三
秋の日は鳥を巻きたる	⑦三七	秋の日はまる寝つつまし	②六〇	秋のもの	③四八
秋の灯が山へうつしぬ	⑥三二	秋の日も春の夕も	①三七	秋の山紅葉しぬれば	③四六
秋の人	①一六	秋の日も牧の平の	⑥三六	秋の山安げに練れど	③三八
秋の日に白を着るなる	③一六	秋の灯や	③一七	秋の雪	①三四
秋の日に天閣台の	⑦四四	秋の昼甘しと身さへ	③一五	秋の宵	③一四

あきの一あけか

秋の夜に	④三〇	秋ふかし法師の溪に	⑥三三	飽くと云ひぬ	②七〇
秋の夜の кафエエの卓に	②四二	秋更けし	④五七	あくどしや	①六
秋の夜の澄みし清さと	③一八	秋更けて	②四七	飽くとなく	⑤三
秋の夜の葉山の灯かげ	⑦八七	秋まつり	①三〇	飽く日なく	⑥一九
秋の夜の灯かげに一人	②二六	秋御歌	①四四	あくまでも	③六
秋の夜の山の底なる	⑥一六	秋もしろし	①四六	悪名の	①一五
秋の夜は帯も袂も	②四三	秋山の草を分けつつ	⑥一七	悪名を	⑥三九
秋の夜は机をてらす	②四三	秋山の蝶家の蔭を	⑥元	悪竜と	②一四
秋の夜はわりなし三時	④三七	秋山の日時計の石	⑦一八	悪竜の	④一四
秋の夜や普通寺にて	⑦四八	秋山の檀山桑	⑤二〇	翌くる日の	⑥三三
秋の夜やときにさびしき	②三〇	秋山の栗鼠の類ひに	⑦二〇	明くる夜の	①二七
飽きはてぬ	⑤一四	秋よりも	③五七	飽くをもて	②三五
秋はなほ	⑥三三	明かに	④四三	明方に	⑦七
秋は似ぬ	④三七	秋を栖む	①四八	明方の雨の名残の	⑥六
秋は先づ	②四二	秋を人の	①四〇	明方の伊豆のいさり火	⑥三六
秋はよし	③一九	秋を三人	①三三	あけがたの鶯きさし	①一九
秋晴れて	④二一	悪縁も	⑤三九	あけがたの春日の宮の	②一〇
商びとの家に生れし	②三七	あくがれや	①二五	明方の燭はのぐらき	⑤三〇
商びとのわが弟は	②三五	飽くしらず	②九四	明方の南宗画より	④四四
秋深し奥山を踏む	⑤五五	悪心の	⑥三八	明方の光に我れの	⑦四七
秋深しこの日も栗鼠の	⑦四九	悪僧の	⑦三三	あけ方の星のあかりに	②四二
あきふかし総国分寺	⑦八七	芥焼く	⑦三七	あけがたの山の巖間の	②三三